

# トゥキュディデスとクセノポンのConnective' と

著者	柳沼 重剛
雑誌名	文藝言語研究. 言語篇
巻	13
ページ	1-20
発行年	1988-02
その他のタイトル	On the 'Connective' and in Thucydides and Xenophon
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/13534">http://hdl.handle.net/2241/13534</a>

# トウ キュディデスとクセノポンの

## ‘Connective’ Γάρ と Δε

柳 沼 重 剛

### 1

英語の文章を書く時の鉄則のひとつに、「接続詞（とくに and）で始まる文を書くな」というのがあるが、ギリシア語ではこれとは逆に、何らかの接続語（今私が直接に考えているのは *particula* とよばれる不変化小辞）を含まない文章は非常に少ない。もっとも、*particula* ということを使うなら、近代語同士の間でも、英語にはこれがほとんどないがドイツ語では、ギリシア語ほど豊富ではないにしても、とにかく英語に比べればはるかに多用されているようだし、また古典語の中でも、ラテン語は *particula* をあまり使わない言語と言えそうである。こうなると *particula* というものは各国語、あるいはその言語を使う人間の民族性によるというところまで議論は行ってしまうかも知れない。しかし *particula* 一般についてなら、それは多くの場合、それぞれの意味を表わすと同時に、そしておそらくそれ以上に、書き手や話し手の感情とか気分とかいうものに関わっているものなので、そういう *particula* をたくさん含んだ文を読む外国人や翻訳家を苦勞させはしても、要するにそれだけのことだろうが、*particula* の中でもとくに ‘connecting（あるいは connective）particles’ と呼ばれるもの<sup>(1)</sup>（つまり接続詞ふうのはたらきをするもの）は、ただそれだけではすまない問題を含んでいるように思える。

例えばギリシア語だと、「キュロスはそこに二十日間留どまっていた。というのは兵士たちがそれ以上先へ進むことを拒否したからである。 というのは、 彼らはペルシア王に向かって進んでいるのではないかと疑い始めていたからである。だが諸将の中でもクレアルコスがまず最初に、部下の兵士たちを鞭でひ

っぱたいても進ませようとした。しかし、出発しようとするたびに、彼らはクレアルコスと彼の荷駄に石を投げた。そしてこの時、クレアルコスはすんでのところで石で打ち殺されるのを免れたのだったが、しかししばらくの後、兵士たちに強制はできないものと知ったので、彼らを集会へと召集した。」(クセノポン『アナバシス』1.3.1-2)と書く。文中下線を付けた語は、‘connectives’をもれなく日本語に置き換えたものである。そして、このようにわざとらしく訳したにもかかわらずそれほど不自然とは感じられないのは、日本語もまた‘connectives’をかなり多用する言語だからである。かりに下線部を全部抜かした日本語の文章を書いたら、われわれにとってはその方が不自然だと感じられようし、それだけでなく、分かりにくくさえなるであろう。ギリシア語でも、これらの‘connecting particles’を取り除いたら、もはやギリシア語でなくなってしまう。そこで、Aという文——その文は単文でも複文でも重文でも構わない——とBという文が何の接続語もなしに並んでいる文章を書く人(例えば英語国民)にとっては、その二つの文が「そして」とつながっているのか「しかし」とつながっているのか、そのつながり方を書き手はどうやって読み手に伝えているのか、読み手はどうやってそのつながり方を感じとっているのか、それが問題になる。われわれは何の不便も感じていないと英語国民は言うにちがいない。しかし英文——とくに論説や講演の英文——を日本語に訳そうとすると、原文にはない接続語(「そして」「しかし」「で、…」「が、…」等々)をのべつ挿入したくなるものである。

こういうことを念頭におきながら、以下に取り上げるのはギリシアの散文家——具体的にはヘロドトスとトゥキディデスとクセノポン——がこの connecting particles をどう使っているか、そしてそれはどういう問題をわれわれに提供しているか、という問いである。

## 2

まず connecting particles の中で最も代表的な γάρ (「というのは…だから」と δέ (「そして」「だが」)の使われ方を調べる。なぜ γάρ と δέ かと言うと、これらの particles は頻度が最も高いからである。もっとも、頻度ということだけを言うなら、γάρ よりは μέν ということになるだろうが、μέν の‘connective’な機能は、μέντοι のような合成語を別とすれば甚だ疑わしいので取り上げないことにした。γάρ にもいろいろな用法があるが、今回調査の対象

とした範囲では、1. 「というのは…だから」、2. 「実際」、3. 「すなわち」のいずれかに帰することができる。実際に使われている比率は、「というのは…だから」が大体 80% である。(ただし今回は、本誌の前々号で取り上げたカッコ付き挿入文中の先行の γάρ は取り上げなかった)。δέ も結構いろいろに使われるが、これも単独に使われた場合には「そして」(これが圧倒的大多数)と「しかし」に集約されてしまう。しかし γάρ も δέ も、他の particles と結んで連語をなすことが多い。例えば ἀλλὰ…γάρ, ἀλλὰ γάρ, καὶ γάρ, γὰρ οὖν, δὲ καὶ, δ'οὖν などである。しかしこれらの場合は、わずかな例外を除けば、これらの連語の先行する語 (例えば ἀλλὰ γάρ ならば ἀλλὰ) の力が強いことは間違いないので、そのように処置した。例外というのは καὶ γάρ で、これはほとんどの場合 γάρ として採用した (Hdt. 1. 166.1; 176.3; Thuc. 1. 141.7; 2. 42.3; Xen. An. 2. 1.7 では、通常の連語の particles と同様に καὶ の方採った)。<sup>(2)</sup> もう少し例外があつて、Xen. An. 2. 6.13 の καὶ γὰρ οὖν は οὖν を採り、同じく Xen. An. 1. 10.8 の δ'οὖν も οὖν として採用した。<sup>(3)</sup> さてそこで表を示す。

	γάρ	δέ	その他の Ptc.	Asyndeta	計
H	114 (11.3%)	681 (53.5%)	249 (18.9%)	208 (16.3%)	1,274
				*79 ( 6.2 )	
	48 (17.7 )	66 (24.4 )	122 (45.0 )	35 (12.9 )	271
				*25 ( 9.2 )	
T	140 (11.9 )	656 (55.6 )	290 (24.6 )	93 ( 7.9 )	1,179
				*24 ( 2.0 )	
	127 (26.4 )	154 (32.0 )	142 (29.5 )	58 (12.1 )	481
				*10 ( 2.1 )	
X	77 ( 9.0 )	514 (59.2 )	229 (26.4 )	47 ( 5.4 )	867
				*17 ( 2.0 )	
	85 (22.5 )	124 (32.8 )	122 (32.8 )	47 (12.4 )	378
				*20 ( 5.3 )	

- 註 1. 表中 H はヘロドトス, T はトウキュディデス, X はクセノボンを表わしている。  
 2. H, T, X それぞれの、上段は彼らの歴史書の叙述部、下段は演説や登場人物の言葉の直接話法による引用文に関する。  
 3. 調査の対象にしたのは、ヘロドトスは彼の『歴史』の第一巻全部、トウキュディデスは第一巻と第二巻全部、クセノボンは『アナバシス』の第一—三巻であ

り、それらの中には、ヘロドトス (H) ならば叙述の文 (上段) が 1,274 あり、引用文が 271 あり (表右端の「計」の欄)、トゥキュディデス ならば叙述文が 1,179、引用文が 481 あり、クセノポン ならば叙述文が 867、引用文が 378 あり。

4. 「その他の Ptc.」とは、 $\gamma\acute{\alpha}\rho$ ,  $\delta\acute{\epsilon}$  以外のすべての connecting particles ということである。
5. 'Asyndeta' とは文と文が何の 'connective' もなしに並べられている箇所のことである。それがさらに上下二段になっていて、下段には数字の前に \* 印が付いているのは、次のことを意味する。すなわち上段は Asyndeta の総数であるが、この中には、connective はないが、言わばそれに代わるべく、指示代名詞や指示副詞が先行する文あるいは後続の文のどちらかにあって、<sup>(4)</sup> それによって二つの文のつながりが保たれている、という場合が含まれている。下段の \* 印付きの数字は、そういう文を除いた Asyndeta の数であり、言わば正真正銘の Asyndeta である。

この表で目立つことは次の通りである。

1.  $\gamma\acute{\alpha}\rho$  の占める比率が、三人に共通して、引用文では叙述部より高くなる。とくにトゥキュディデスとクセノポンにおいてそれが著しい。
2.  $\delta\acute{\epsilon}$  の占める比率が、三人に共通して、引用文では叙述部より顕著に低くなる。
3.  $\gamma\acute{\alpha}\rho$  と  $\delta\acute{\epsilon}$  以外の particles の比率が、三人に共通して、引用文では叙述部より高くなる。とくにそれが顕著なのはヘロドトスである。
4. Asyndeta の比率が、三人に共通して、引用文の方が叙述部よりわずかながら高くなる。そしておそらく、ヘロドトスは比較的無造作に asyndeta を使っているが、トゥキュディデスとクセノポンはかなり意識的にそれを避けようとしている。

このうち 3 と 4 は当然予想されたこととも思えて、別に驚きはしない (ただしヘロドトスの「その他の Ptc.」の比率が、叙述文では 18.9%、引用文では 45% というのは想像以上に大きいと認めないわけにはいかない)。そこで 3 と 4 については、1 と 2 について考える中で触れることにしようと思う。しかし 1 と 2 はむずかしい。

### 3

まず 2 について言えば、トゥキュディデスが  $\delta\acute{\epsilon}$  を演説の中では叙述部に比べてこれほど減らして使っている、ということより先に、彼が叙述部でこれほ

どたくさんの δέ を使っているということそれ自体が、すでに大きな驚きであったことをまず白状しておかなければならない。テキストを読んでいる時に受ける印象とは違うからである。クセノボンがたくさんの δέ を使っているのなら、なるほどと思う (OCT の『アナバシス』の最初の 10 頁には、各頁に δέ が 7, 5, 8, 6, 8, 6, 11, 8, 12, 6 と分布している)。しかしトウキュディデスはそんなに使っていたらどうかというのがはじめに受ける印象である (OCT のトウキュディデスの最初の 10 頁の δέ の分布は、0, 4, 2, 7, 4, 2, 2, 5, 5 である)。もちろんこれには文中の δέ は含まれていない、文頭の δέ だけ、つまり先行する文とのつながりを保証している δέ だけである。それだけになおいっそう、そんなにあったらどうかといふかしむ。ことに、例えばクセノボン『アナバシス』2. 4.8—13 (これで OCT のちょうど 1 頁になる) などを讀んだ記憶は簡単には消えなくて、というのは、この 1 頁には 17 個の文があって、その 17 の文のうち 15 までが δέ で前文とつながっている、そして OCT のこの頁は 25 行で、そこに 15 個の δέ があるのだから、2 行足らずごとに δέ … δέ … と読まされるわけで、この頁の終わりにたどり着く頃には些か δέ に食傷気味になっている。ところがトウキュディデスではこんなことはない。上記 OCT 最初の 10 頁中最も δέ が多いのは 4 頁目で、ここは 1. 5.3—7 の途中までであるが、トウキュディデスにしてはめずらしく Parataxis の文が並んでいる所である。それでもクセノボンのように δέ に食傷することはない。こうなっている、

καὶ … τό τε … πᾶσα γὰρ ἡ Ἑλλάς …, καὶ … ὥπερ … σημεῖον δ' ἔστι … ἐν τοῖς …, καὶ οἱ πρεσβύτεροι … ἀφ' οὗ … μετρία δ' αὖ ἐσθῆτι … καὶ … ἐγυμνώθησάν τε … τὸ δὲ πάλαι …, καὶ … ἔτι δὲ καὶ …, καὶ … πολλὰ δ' αὖ καὶ ἄλλα … τῶν δὲ πόλεων ὅσαι μὲν …, … καὶ …, αἱ δὲ ….

δέ が耳障りになるというようなことは少しもないであろう。しかし考えてみると δέ が 1 頁に 15 個もあるというのは、一つの文が短くて、だから 1 頁にたくさんの文が詰め込まれた結果であって (先刻も述べたように OCT のこの頁には 17 個の文が入っている)、そこへいくとトウキュディデスは、一つの文が長いから、従って文と文の切れ目がクセノボンの場合ほど 1 頁の中に来ることではなくて (OCT の上に引用した部分は 1 頁にやや欠けるが、9 個の文から成っている)、従って文頭の δέ の数は当然減ってくることになるわけで、テキストを読む時の印象はこれに由来するのである。OCT のこの頁は 31 行あって、その間に 7 個の δέ を聞くことになるが、そうすると約 4 行半に 1 回の

割合になり、これでは 2 行足らずに 1 回 *δέ* を聞かされるクセノポンに比べれば、トゥキュディデスの文頭の *δέ* がそれほど印象に残らない、少なくとも *δέ* を多用しているという印象が残らないのは当然であろう。しかも文が長いということは、文が単文でなく複文、あるいは重文になるということで、そうなれば文の句節の間には必ず何らかの *particle* があるわけで、このことから *δέ* ばかりがむやみに耳に残るということとはなくなる。

しかし、それにもかかわらず、このような印象とは別に統計をとってみると、トゥキュディデスとその歴史叙述において、ほとんどクセノポンと同程度に *δέ* を使っていることは認めないわけにはいかない事実だということは重要で、さらに上の表で見るように、三人とも文と文をつなげるのに半ば以上を *δέ* に頼っているということを思い合わせるならば、*δέ* というのは文と文をつなぐ最も普通の手段だったと一応の結論を出してもよいであろう。少なくとも叙述する文章では、*δέ* … *δέ* … と文をかさねていくのが常道であったと考えてよいであろう。

#### 4

*δέ* というものがそういうものであるとするならば、それがトゥキュディデスの演説や、ヘロドトスやクセノポンの登場人物の対話の中で減るのは当然だということになるだろう。だから *δέ* が減る方はこれで分かったとして、分からないのは、なぜ *γάρ* が増えるかという方、つまり第 2 節の終わりで注目した第 1 の点である。もちろん実数は引用文では叙述部でより少ない。しかし文のつなぎ手として使われたすべての *particles* の中で *γάρ* が占める比率、とくに *δέ* に対する比率がぐっと増える（それでも相変わらず *δέ* の比率が最も高い、しかし圧倒的に *δέ* の比率が高いということとはなくなる）のはなぜかということになる。先ほど、第 2 節のはじめにちょっと触れたように、*γάρ* の意味は、今回調査の対象とした範囲では、全体としては「というのは……だから」「実際」「すなわち」のいずれかに帰してしまうことができるのだが、引用文独特の *γάρ* の用法というようなものがあるのだろうか。

ところがトゥキュディデスの *γάρ* の用法を見ると、叙述の部でも演説の中でもほとんど同じである。すなわち叙述でも演説でも「というのは……だから」というのが全体の .80% を占め、「実際」が 11% (叙述) が 13% (演説) で、残りが「すなわち」その他であり、言い換えれば、意味そのものでも意味ごと

の使い方の比率でもまったくと言ってもいいほど違ってはいないのである。つまりトッキュディデスは、演説の中では *γάρα* の使用率を叙述の中でよりはぐっと高めたが、*γάρα* に担わせた意味そのものは演説でも叙述でもまったく同じ、ということである。ではクセノポンではどうか。しかし調べてみると結局、クセノポンでも、トッキュディデスに見たこの事情はあまり変わらないと知る。すなわち、クセノポンでも、叙述でも引用でも 78% が「というのは……だから」で、10% (叙述) または 18% (引用、これは少し違う) が「実際」で、残りの 12% (叙述) または 10% (引用) が「すなわち」その他になっているのである。こうしてトッキュディデスでもクセノポンでも、*γάρα* は叙述文・引用文に共通して、「というのは」が 80% 前後、「実際」が 10—18%, 残りのわずかなパーセントがその他の意味に使われているわけで、*γάρα* は共通した一定枠の意味に使われ、その意味の使用比率までがほとんど一定していることが分かる。

となれば、*γάρα* それ自身の意味は、叙述・引用の間に何の相違もないことになったわけだから、それにもかかわらず *γάρα* の使用率が引用文において顕著に高まったということは、演説または会話という文の形式の方が、叙述の文よりは *γάρα* を用いる機会が多い、つまり人間が実際に話す言葉は、演説、会話というように、その形式上の整合度 (formality) において違いはあっても、それ以上に、純粋な書き言葉との相違の方が著しく、その著しい相違が、上のような演説・会話における *γάρα* の増加の原因になっている、という結論をおのずと導き出す。簡単に言えば、*γάρα* は叙述文でも相当頻繁に用いられる particle ではあるが、本質的に話し言葉となじみやすい性格を持ったものだ、ということになるであろう。

## 5

ここで第二節の終わりで「目立つこと」として挙げた 3 番目のものを思い出すのは役に立つかも知れない。引用文で増えるのは *γάρα* だけではない、*δέ* 以外のすべての particles が増えているということである。つまり、*γάρα* だけが増えるのではなく、ほかの particles も増えたが、*γάρα* はとくにその増え方が顕著だということであって、従って、なぜ *γάρα* が増えるのかの考察は二段階を経なければならぬことになる。すなわち、なぜ引用文では *δέ* 以外の particles の使用率が高くなるのかを問うのが第一段、そして、そのもろもろの particles の中でもなぜ *γάρα* がこうまで目立つのかを問うのが第二段というこ



とになる。

まず第一段。これについては、先には「当然予想されたこととも思え」と言ったにとどまったのだが、ここでもう少し説明をしておいた方がよいだろうと思う。そして、この点を考える際にまず参照した方がよいと思われるのは、クセノポン『アナバシス』第一巻第九章と、第二巻第六章である。実はこれらの箇所は、私がかつてまったく別の事柄のために引き合いに出した箇所で、<sup>(5)</sup> その時は、クセノポンが事件の叙述をここではぶつくりやめて、前者では討ち死にした小キュロスの人柄を称賛し、後者では、ペルシア軍のだまし討ちにあったクレアルコスをはじめ3人のギリシア人指揮官の人物評をするために、また叙述の筆を絶って批評を述べている箇所だということに注目したのである。ところがこの両方の箇所とも（しかしとくに前者は極端に）、その文章の中の particles の使い方の点でも、『アナバシス』全体とは違って浮き上がって見えるのである。先ほども述べたように、『アナバシス』の文章で particles について目立つことと言えば、何よりもまず *δέ* の行列であろうが、ここではそうっていない。第九章全部では長すぎるが、あえて particles だけ拾うところになっている。

μὲν οὖν … μὲν γὰρ … γὰρ … (ἐνθα) … δὲ … (ὥστε) … (ἐνθα) …  
*δέ* … *δέ* … καὶ … καὶ … *δέ* … καὶ γὰρ … καὶ … τοιγαροῦν … *δέ* …  
 καὶ γὰρ … *δέ* … καὶ … καὶ γὰρ οὖν … οὐ μὲν δὴ οὐδὲ … *δέ* … (ὥστε)  
 … γε μέντοι … οὖν … (ὥστε) … τοιγαροῦν … γε μὴν … καὶ γὰρ οὖν  
 … καὶ γὰρ … ἀλλὰ μὴν … τοιγαροῦν δὴ … *δέ* … (ὥστε) … γὰρ …  
 γε μὴν … καὶ γὰρ … *δέ* … *δέ* … καὶ … καὶ … *δέ* … γὰρ … οὖν …  
*δέ* … (τούτοις) … οὖν … *δέ* … μὲν γε … *δέ* … / (asynd.) … καὶ …  
 δὴ … *δέ* … *δέ* … γὰρ … *δέ* … *δέ* … *δέ* …

以上で OCT 5 頁, 125 行で、文の数は 59 であり（だから文の長さは平均 2 行強であって、これはクセノポンの文としてはやや長めになる）、<sup>(6)</sup> そのうち *δέ* は 17、しかしその数もさることながら、ほどよく配分された位置も注目に値しよう。平均何行に 1 回などということはこの際無意味で、上記のように配分されていると了解すれば足りるのであるが、先ほど引き合いに出した同じ『アナバシス』の 1. 5.3—7 との対比をするために、参考までにその「平均」というのを示すと、ここでは 7 行半に 1 回の割合で *δέ* が使われていて、先ほどの 2 行足らずに 1 回というのは大変な違いであることが分かってしまう。そし

てここでは、*γάμ* がとくに多いとは言えないが、とにかくほかの箇所ではクセノポンがほとんど使っていない **participles** が動員されているという感じがする。

大事なのは、これらの箇所がいずれも、クセノポンが叙述を一旦やめて称賛と批評に専念しているところだということで、「叙述」と「称賛」あるいは「批評」がクセノポン自身にとってもいかに別のものであったかは、上記論文で指摘した通りである。言い換えれば、『アナバシス』第一巻第九章と第二巻第六章は、クセノポンの意識においても、「叙述」の中にそれとは別のジャンルの文章を挿入した箇所なのである。そして言うまでもなく、叙述とは事実の叙述、起こったことを起こった通りにそのまま記すものであるのに対して、称賛や批評は筆者の意見や評価を交えて述べる文章である。叙述がひたすら客観的に記述する（叙述された結果が本当に客観的に事実を伝えているかどうかは今が問題ではない。筆者がそう思いながら書いているか、あるいは読者にそう思ってもらいたいと期待しながら書いているかどうかが問題なのである）のに対して、称賛や批評には強く主観が打ち出される。主観ばかりではない、筆者の感情も少なからず文章に現われずにはいないだろう。これがクセノポンの文章が、『アナバシス』のこの両方の箇所で **particles** の使用上、周囲の文章に対して特異性を示す原因だろう。すなわち、叙述の文章では比較的単純だった **particles** の使い方が、この二章においては変化に富んで多様なものになったのである。

そこで引用文だが、今この連関において『アナバシス』のこの箇所を引き合いに出したことから見当がつくように、引用文とは演説や会話のやりとりの引用であるが、演説は聞き手を説得するために行なうものであり、会話に至ってはもっといろいろの要素が混じり込んだ言葉であろう。そして類縁関係ということから言えば、叙述よりは称賛・批評に近い、ということを言いたいのである。そして演説がこの観点からして称賛・批評と同類のものならば、こちらの方に変化に富んだ **particles** の使い方が見られるのは、クセノポンがいみじくも示してくれた例から推しても、至極当然のことと言えるわけである。

## 6

そこで第二段に移る。第4節に述べたところから、*γάμ* が主として「理由」を述べる。つまり、先行する文章で述べられていた事実について、その理由を説明する文章を後続させるために使われる **particula** である、と決めても構わ

ないと思うので、それを議論の出発点に置くことにする。

ところで、理由の述べ方にもいろいろあって、その一つはこの *γράφ* を用いるやり方だが、ほかに、理由を表わす接続詞によって副詞節を用いるやり方、関係節を用いるやり方、分詞構文を用いるやり方、その分詞構文の一種と見てもよい絶対的属格を用いるやり方、さらに前置詞 *διὰ* + 不定法という句を用いるやり方などが考えられよう。ただし、以前にも指摘したように、<sup>(7)</sup> *γράφ* を用いるやり方とほかのすべてのやり方の間にはかなり大きな違いがある。それは、*γράφ* を含む節にはつねに挿入節的、付け足しのな気分がつきまとうということである。副詞節や関係節や分詞構文、そしてこの中でもとくに絶対的属格などは、挿入節的な用いられ方をすることもあるが、こちらの方はあくまでも「こともある」のであって「つねに」ではない。それともうひとつ、もっと基本的な違いもある。それは、副詞節や関係節はもとより、分詞構文、そして中でもとくに絶対的属格も、言わば主節に対する従属節の位置にあり、つまり、複文の一部となって主節あるいは他の従属的要素との関係には立つけれども、文と文をつなぐ用はしない、ということである。するとどうなるか。

まず想像されるのは、同じ理由を述べるにしても、叙述の場合は、「……なので……した」というように、理由とそれのもたらした結果とを、従属節（または句）と主節という形で一つの文の中に収める傾向があるのに対して、演説その他の話し言葉では、「……した、それというのも……だったからだ」という形で述べる傾向が強くて、その結果が *γράφ* 使用率の増大ということになるのではないか、ということである。もしそうだとすると、叙述の中では、理由も事実の中に取り入れられている、事実の一部として語られているのに対して、話し言葉ではそのような厳しさはなく、理由は意見ないしは感想として与えられているにすぎないことになる。

そこで思い出すが、私が本誌前々号で紹介した各散文作家のペリオドス構成法 ( $H_1$ ,  $H_2$ ,  $H_3$  というような) である。その拙論の 15 頁の表 4 によってトゥキュディデスの  $H_1$ ,  $H_2$ ,  $H_3$  の使い方をみると、

	$H_1$	$H_2$	$H_3$
叙述	26%	29	15
演説	19%	44	16

となっていて、これは有望である。これらの数を横に合計したものはトゥキュディデスの文全体の中の複文構成率を示しているわけで、ここからたちまち何

かが言えそうに思えるからである。つまり、演説での方が叙述でより  $H_1 + H_2 + H_3$  の値が小さければ、それだけ「理由を示す副詞節」その他を用いることが少ないはずで、相対的に *γάρ* を用いることが多くなっている可能性があるからである。ところがこの足し算を実際にやってみると、叙述 70%, 演説 79% となって、こっちの思惑は完全に裏切られる。これは残念と言うほかない。 $H_1$  でこそ 26%—19% と減りはしたものの、 $H_2$  でも  $H_3$  でも、叙述でよりは演説での方が率が高いのである。つまり従属節が先立って主節が後につづく、例の「上りのペリオドス」は叙述の方に多く演説では減り気味だが、その他の形の複文はむしろ演説の方に多いということで、これでは先ほどの想像は誤っていたと認めるしかないであろう。それでもあきらめずに、クセノボンについても同じことをやってみようか。『アナバシス』の今回取り上げた箇所について、単文 (O), 重文 (P), 複文 ( $H_1, H_2, H_3$ ) を見る。やはり表にしよう。

	O	P	$H_1$	$H_2$	$H_3$		
叙述	22%	15	24	23	16	→ $H_1 + H_2 + H_3$ 合計	63%
引用	23%	8	28	30	10	→	68%

となっていて、これもだめである。いよいよあきらめるほかはなさそうである。トウキュディデスの場合と様相は違うけれども、複文化率はやはり演説の方が高く、われわれの誤りを指摘しているようである。

しかし考えてみると、誤っているのは、*γάρ* を使うことと複文を書くこと、理由を表わす副詞節を使うこととの間に、たがいに排斥しあう関係があるとうかつにも思い込んだことにあるのではないか。「というのは、……なので……したからである、」というような言い方はいくらでもありそうではないか。そしてそれは現にある。

さすがに理由を示す接続詞、例えば *ἐπεὶ* や *ὥς* と *γάρ* を並べることには気持の上で何か抵抗でもあるのだろうか、そういうのではない。唯一の例外はトウキュディデス 1. 49.3 の *ἐπειδὴ γὰρ προσβάλλουσιν ἀλλήλοις* … だが、<sup>(78)</sup> これは動詞が希求法であるところからも分かるように、未来の時を指して理由を述べているわけではない。いずれにしても、*γάρ* とたがいに排斥しそうな複文というのは  $H_1$  だけで、あとは問題にならないだろう。実際にはどうなっているかという、クセノボンの場合は極めて簡単で、彼が用いた *γάρ* で  $H_1$  に属するのは 3 個しかない。1. 3.11. (*ἀνευ γὰρ*…), 1. 5. 16. (*εἰ γὰρ*…),

2. 2.12. (ἢν γὰρ...). トッキュディデスの方はもう少しめんどうで、クセノポンよりは  $H_1$  を多く使っているし、 $H_1 + H_2 \rightarrow H_3$  という形で  $H_3$  も多いからである。それでも彼が  $\gamma\alpha\rho$  をそういう  $H_1$  や  $H_2$  と共に使っている場合を見ると、大半は分詞構文（絶対的属格を含む）によっており、少数の場合  $\epsilon\iota \gamma\alpha\rho$  によっている。こうしてわれわれはこの節のはじめに抱いた期待を抱きつづけることができるのである。

## 7

しかしそれにしても、「… (な) ので」などという意味の文はどれぐらいあるものだろうか。例えば『アナバシス』第一—三巻ならば、叙述文中に 102, 引用文中に 101, 計 203 ある。もちろん訳すとなったらまた別の考慮をはたかせなければならぬから、全部が全部「…なので」になるわけではないだろうが、意味の上で間違いなく「…なので」ととれる箇所を拾うところなる。ところが、第 2 節の表に示したように、クセノポンの当該箇所の文の数は、叙述部分が 867, 引用部分が 378 であり、従ってこの箇所の叙述文と引用文の数の比率は 7:3 である。だから上の「…なので」の計 203 箇所のうち、その 0.7, つまり 142 箇所が叙述文の中に現われ、残りの 61 箇所が引用文中に現われるのならば、叙述・引用の双方に「…なので」が均等に分布していることになるが、事実は叙述文中が 102, 引用文中が 101 だから、これはかなり引用文に偏った分布である。あるいはもっと簡単に、叙述部の 867 の文中に 102 の「…なので」があるということは、8.6 個の文ごとに 1 回、引用文の方は 378 の文中に 101 だから 3.7 個の文ごとに 1 回の割合で「…なので」と言われているということだと理解するのもよい。どちらにしてもつまり、 $\gamma\alpha\rho$  がどうのこうのと言う前に、すでに「…なので」という文そのものが引用文に多いということなのである（ついでにその「…なので」という文のうち  $\gamma\alpha\rho$  によっているものがどれだけあるかと言うと、叙述部 43, 引用部 66 で、これは叙述部・引用部それぞれの「…なので」全体の 42%, 65% に当たる）。

これだけはつきりしていれば、もはや「…なので」という文は叙述の文よりは演説や会話のせりふに多いことは確かだと断定して、それではどうしてそういうことになるのかを考えてもいいのかも知れないが、われわれはここでもあまり簡単に考えてはいけけないのではないかと、少なくとももう一人、トッキュディデスの場合も見なければならぬのではないかと恐れる。

そのトゥキュディデスはこうなっている、と言うより、やはり表にした方が分かりやすいであろう。ついでだからクセノボンもいっしょに表にしてみる。ただしトゥキュディデスは第一巻のみを調査対象とした。

		文総数	「…なので」	頻度 A	頻度 B
トゥキュディデス	叙述	601	206	34%	1/2.9
	演説	258	133	52%	1/1.9
クセノボン	叙述	867	102	12%	1/8.6
	引用	378	101	27%	1/3.7

また上の「…なので」についてだけもう一つ表を作ると、

		「なので…」	<i>γάρ</i>	分詞
トゥキュディデス	叙述	206	79 (38%)	82 (40%)
	演説	133	74 (56%)	26 (20%)
クセノボン	叙述	102	43 (42%)	21 (21%)
	引用	101	66 (65%)	10 (10%)

まず註をつける。上の表で「…なので」というのは、「… (な) ので」と理由を述べている文・節・句のことである。その右の頻度とは、調査したすべての文の中でそういう理由を述べている文などがどれぐらいの比率を占めているかを示すもので、頻度 A というのは、見れば分かる通りパーセンティジである。頻度 B というのは、文いくつにつき 1 回現われるかを示したもので、例えばトゥキュディデス叙述の 1/2.9 とは、2.9 個の文の中に 1 回の割合という意味である。下の表の *γάρ* とは、*γάρ* によって「…なので」という意味を表わしている文のことであり、分詞とはそれを分詞（ほとんどが分詞構文）によってそれを表わしている句のことである。

さて何が見えるか。まず先ほど来につづきで、トゥキュディデスでも「… (な) ので」と理由を示す文は、叙述よりは演説での方がはっきりと頻度が高い。従ってここまで来れば、どう理由かは分からないながらもとにかく、理由を示す文・節・句は叙述の中でも結構多い（とくにトゥキュディデスの叙述で、3 個弱の文ごとに 1 回、何らかの形で理由を言っているというのは驚くべきことである）が、演説になるともっと多くなって、トゥキュディデスなどは文一つおきごとに何か理由を言っていることになる。クセノボンと比べてこれほど多いというのも驚くほかないことである。

ところで、理由を述べるというのは、いかなる場合でも、筆者の解釈を含むものであって、その点事実の記述よりは主観の要素が強いと言える。<sup>(8)</sup> だから「…なので」が叙述よりは演説に多くなるのだと、先ほど第5節で *particles* の多様さについて説明したのと同じ論法を、ここでも使うことができる。そしてその論法を念頭においてもう少し細かく見ていくと、いかにもそれらしいと思える箇所がいくつか見えてくる。今しがた私は、トゥキュディデスが演説では文一つおきに「…(な)ので」と言っていると驚いたのだが、これはテキストを読んでいる時にはそんなことには気づかずにいたのが、統計をとってみたらそういう結果を知らされた、ということである。また先には(第3節)トゥキュディデスがこんなにまで *ὅς* を使っていたかと驚いたが、それも同じ理由によっている。しかし読んでいるだけでも気がつくこともあるわけで、例えばトゥキュディデスの叙述だと、普通「五十年史」とよばれている箇所(第一巻 89—118)では理由を述べる文・句がほかの箇所に比べて少ないようだとか、「考古学」(または「古代史」と呼ばれている箇所(同 2—20)では *γάρ* が多いようだとか、もっと短い範囲だと、テミストクレスの失墜とペルシアへの逃亡を語っている箇所(同 135—9)の 136 節の後半以後には *γάρ* ばかりが使われているとか、クセノポンの『アナバシス』の中でほとんど唯一の演説らしい演説(演説しているのはクセノポン自身、第三巻 1. 13—44, 2.9—38)でも、のべつに *γάρ* が使われているとか、そういうことである。

## 8

「五十年史」というのは、トゥキュディデスがペロポネソス戦争史の記述を始めるに先立って、この戦争のそもそもの原因は、ペルシア戦争後今次大戦までの 50 年間(前 481—430)のアテナイの勢力の増大、それを恐れた諸国、中でもスパルタの動静にありと見てそれをあとづけたものである。<sup>(9)</sup> アテナイのペルシア戦争勝利は前 480、トゥキュディデスの生年は前 460 頃と推定されるので、ペルシア戦争での勝利は彼の生まれる 20 年も前のこと、ペロポネソス戦争が始まったのは前 430 なので、この時トゥキュディデスは 30 歳前後、現に彼は提督として出征している。

ところで「五十年史」の記述に即して言うと、102 節までが彼が生まれる前の出来事、103 節以下が彼が生まれてから後の出来事の記述となっている。今かりにここを境にして集計してみると、89—102 節では文の数 81、「…ので」

32, 内 *ῥάπ* 15 となり, これは 2.5 文につき 1 の割合で「…(な)ので」と言い, そのうち 47% を *ῥάπ* によっていることになる。それに対して 103—118 節では, 文の数 98, 「…(な)ので」14, 内 *ῥάπ* 5 で, 7.0 文につき 1 回「…(な)ので」と言い, そのうち 36% を *ῥάπ* に頼っていることになる。生まれる前と生まれてから後などという区別は無意味だと言われそうだが, 普通ひとは自分が生まれた年以後を現代として実感しているらしいと思われるのを頼りに, 試みに集計してみたらこうなった。「五十年史」には「…(な)ので」という文が少ないと感じたのは, 主としてこの後半部, 103 節以下のせいだったのである。

さらに細かいことを言えば, 例えば 102 節と 103 節では, 年度こそ代わっているが, 同じ事件(イトメ攻略)を通して語っているのに, 102 節では 7 回も「…ので」と言い, 103 節にはそれがまったくないのはなぜかということもあるだろう。<sup>(10)</sup> しかしそれにしても, トッキュディデスにとって自分の経験と思えることを述べる場合にはそれが少なく, 伝聞によるほかない場合に, むしろ「…(な)ので」が多くなる, 言い換えれば, 自分の経験の範囲内のことについて「…(な)ので」と言う場合は *ῥάπ* 以外の手段で言ったと, そう言えそうに思えるのである。このことは「古代史」では文の数 108, 「…(な)ので」54, 内 *ῥάπ* 26 (「…(な)ので」は 2.0 文につき 1, *ῥάπ* は 48%), テミストクレスについての記述(そのほとんどが外国での彼の行動)では文の数 38, 「…(な)ので」12, 内 *ῥάπ* 8 (「…(な)ので」3.2 文につき 1, *ῥάπ* は 67%) ということから裏付けられよう。

## 9

*ῥάπ* というのは英語の *for* に似ていると前々号で私は言った。この時私の頭の中には実は, *ῥάπ* は単に「つねに挿入文的, 付け足しの」ということのほかに, 論理的な理由の陳述とか厳密な因果関係の説明よりは状況の説明, 強いて言えば判断の根拠を示すに止どまるのではないか, という思いがあった(英語の *because* に当たるのは接続詞ならば *ὅτι*, 前置詞ならば *διὰ* あるいは *ἐνεκα*, ついでに *ἐπεὶ* は *since* で *ὥς* は *as* だろう)。だから *ῥάπ* で文と文をつなぐ場合, 文中で *διὰ* や *ἐνεκα*, あるいは *ἐπεὶ* や *ὥς* を使うのと似た効果を挙げるけれども(同じではなくても似た者同士である証拠として, 先に述べたように *ἐπεὶ ῥάπ* … とか *ὥς ῥάπ* … とかいう言い回しがないということ



を挙げてもよいかも知れない)、これはあくまでも似ているだけで、実は同じではないと言うべきであろう。だから先ほど第6節で、叙述の中では理由は事実の一部として語られるのに対して、話し言葉では理由は意見ないしは感想として与えられていると言ったのを、ここでもう一度繰り返すことができる。厳密に言えば *γάρ* は理由を示すのではなく、判断の根拠を示しているのである。トゥキュディデスは彼の書物の第一巻の最初の文で言う。なるべく直訳調で紹介するところである。

アテナイ人トゥキュディデスは、ペロポネソス人とアテナイ人の戦争を書き述べて、戦争開始直後から書き始め、これは大戦争になる、これまでに書かれたどの戦争よりも語るに値するものになるであろうと考えて、両者がいかに争ったのかの顛末を記した。この両者がそれぞれ自国のためにあらゆる戦備を再高度に整えていたこと、および他のギリシアの国々が、あるものは直ちに、あるものは熟慮を重ねた後という違いはあったが、両者のいずれかに与したことを根拠に、筆者はこう考えた (*τεκμαίρόμενος*) のである。*γάρ* (これは「実際」だろう)、この動乱はギリシア人および若干の異邦人たち、言わば人類の大多数にとって最大の動乱となった。*γάρ* この戦乱に先立つもろもろの出来事やさらに古い時代のことどもは、あまりの時の隔たりの大きなゆえに (*διότι*) 明確に知る由もなく、ただ諸種の証拠をもとに筆者が考証したところでは、戦争関係のことであれその他何であれ、大事件であったとは思えないからである。」

つづいて言う (1. 2 1—2),

*γάρ* 今日ヘラスと呼ばれている土地には昔は人間が定着して住んでいたわけではなく、移住がしばしばで、次第に多くなってきた外からの者たちに強制されると、人々は以前には簡単に、自分の土地を捨てたらしいからである。*γάρ* 交易ということもなく、海上陸上を問わず外国人と交わるには恐れがつきまとい、…し、…せず、…もせず、…だったからである。

これは OCT 版のトゥキュディデスの最初の 1 頁と少々だが、*γάρ* が 4 個あるのに、本当に厳密な意味での「理由」は *διότι* による 1 個しかない。*γάρ* はすべてトゥキュディデスが前の文で述べたことの根拠だと彼が信じていることを導き出しているのである。似たような例はトゥキュディデスからはもちろん、クセノポンからもいくらでも拾い出せる。要するに *γάρ* は、叙述なら筆者の判断の根拠を、演説なら演説者の判断の根拠を示していると見てよい。

しかし、*γάρ* というような *particula* が、全部が全部そのように割り切ってしまうかという心配もないではないし、また、*γάρ* 以外の、例えば *ἐπεὶ* や *ὅτι* にはこういう例、つまり理由というよりは筆者(話者)の判断の根拠を示

している場合がないのかどうかも気にならないわけではない。まず簡単な方から言うと後者だが、そういう例は多くはないが、ある。トッキュディデスには（もちろん今回対象とした第一、二巻のみだが）1. 30.3; 41.3; 69.5; 2. 89.4; 93.3 で ἐπεὶ が、クセノポン『アナバシス』第一—三巻では 1. 3.5; 7.19; 9.24; 2. 3.23; 5.4 でやはり ἐπεὶ が、2. 5.38 では ὅτι が、ὥρα と同じように使われている。しかし逆に ὥρα が筆者なり演説者なりの思わくを越えて、純粋に理由を示しているという例というのではないと思う。

前者は面倒であり、その面倒である点がまさに ὥρα らしく、一步を進めて particula らしい点だと言えるのではないかと思える。例を一つ挙げてみよう。クセノポン『アナバシス』1. 9.1—3 である。この箇所については先に第 5 節でも触れたが、ここはクセノポンが記述の手を一旦止めてキュロス称賛を始めるところである。この章の第 1 節で彼は、キュロスが「最も王者の風格を具え、統治者たるに相応しい人物であったことは、キュロスと親交のあった人々に一様に認めるところである、」と述べ、さて

ὥρα まず第一に、まだ幼かった頃、兄やほかのペルシア人の子弟らといっしょに教育されたのであるが、すべての点で他のどの子供よりも優れていると考えられていた。ὥρα ペルシアの貴族の子弟はみな、大王の宮廷で教育を受けるのである。/ ここでは (ἐνθα) 士人としての嗜みを十分に学ぶことができ、醜悪なものは一切耳に入れることもなく目にもすることもない (松平千秋訳)、

と言っている。ここには四つの文があって、第二の文は第一の文を、第三の文は第二の文を、それぞれ ὥρα で受け、第四の文は asyndeton だが副詞 ἐνθα が第三の文の「宮廷内」を指してそれとつながる。μὲν もあるが、これは後続の δέ と対応しているだけで、前の文と関係してはいない。松平先生の訳では、これら二つの ὥρα は両方とも訳されていない。第 7 節のはじめにも言ったように、翻訳はただ意味を伝えれば済む仕事ではないから、訳としてはこれらの ὥρα を無視することには何の問題もない。しかし訳さないとしても、どういう意味にとった上で訳さないかを決めるかは問題とすることができる。

まず第一の ὥρα の意味は「というのは…なので」ととってよいであろう。ただし、キュロスが「最も王者の風格を具えている云々」というのは、キュロスの側近の人たちが言ったことであって、クセノポンの判断ではない。従ってこの ὥρα は、クセノポンの判断の根拠ではなく、なぜ側近の人々がそう言うようなことになったか、なぜそれがもっともだと思えるのかの説明で、相変わらず「…なので」に関わってはいるが「…なので」そのものではなく、「…な

ので」と言われる事情の説明である。第二の *ráp* も同じだろう。上の文でキェロスが「他のどの子供よりも優れていた」と言ったわけだが、この *ráp* が示しているのは、なぜ彼が優れていたと判断できるのかの根拠ではなく、優れているのいないのと、そういう比較ができるのは、「みないっしょに大王の宮廷で教育を受ける」という事情があったから、というような事情の説明なのである。

かりにこれらの *ráp* を「というのは」でも「なぜなら」でもいいが、とにかく「…なので」と訳すと、文のつながりが悪くなることに気がつくであろう。つまり、上のトゥキュディデスで見た *ráp* とはちょっと違うのである。そして、この種の *ráp* を含む文を訳す場合には、「実際」、「とにかく」、「すなわち」等で始めて、「…なのだから」、「…なほどである」、あるいはいっしょ簡単に「…なのだ」と結ぶ、これを適宜当てはめれば比較的自然に行く。言い換えれば私は、*ráp* は「というのは…なので」か「実際」か「すなわち」か、この三つだと言ってきたわけだが、実は作品中に頻出する *ráp* はおよそ二種類で、前文で筆者（話者）が述べた判断の根拠を示すのと、前文で言われていることについてなぜそうなのかの説明を加えるのとであり、前者については「というのは…なので」と訳せば差し当たりは何とかなり、後者については上のようにさまざまに訳せる、あるいは、訳すと日本語としては大袈裟に響きすぎその他でわざとらしくなるならば、訳さない方がよく、文脈全体でその気持を表わせばよいことになって、それで松平先生のような訳も出来るのである。

このクセノボンの箇所を紹介するに先立って、私が面倒だと言ったのは主として *ráp* のこの「事情の説明」のために使われている場合のことで、なぜ面倒かという、まず第一に、文中のある *ráp* が「判断の相拠」を示しているのか「事情の説明」をしているのか判然としない場合が結構あって、どうかするとどちらにもとれて、つまりどちらにもとれるほど *ráp* あるいは恐らく *particulae* というもの全般については 'loose' などところがある、そしてこれが *particulae* というものは意味だけでなく、というより意味以上に筆者や話者の気分を表わすものだと思える所以だということである。そして第二は、かりにある *ráp* が「事情の説明」をしているのだと決めることができて、さてそれではそれを日本語でどう言い表わすかということが次の問題になって、これがいちばん厄介である。

*ráp* についての最も行き届いた説明は勿論 Denniston にある。しかしあの本を見ると、なるほどと納得がいくことが多いのは当然だが、反対に、あまり

細かく分析してあるので、今自分が読んでいる作品のある箇所については、その Denniston のまことに多岐にわたる説明のうちのどれが当てはまるのか迷うことになって、そのために作品が読めなくなることがあるという経験が、誰にもあるのではないだろうか。しかし散文に限って言えば、ここに紹介した程度の大づかみな理解がまずあってよいと思う。

散文を書くということを意識し始めて以後のギリシア語の文章では、これほど、文と文は何らかの *particula* でつながれていた。そして正真正銘の *asyndeton* というものはこれまで見てきたようにごく稀にしかないのであるが、しかしいくら文と文をつなぐといっても、それを接続詞によって行なっている例はほとんどない。*καί* (and) や *ἀλλά* (but) は重文の、前半の節と後半の節をつなぐ用はしても、これらの語で文を始めることはあまりないという点では、英語と同じと言わなければならないのかも知れない。

### 註

- (1) この呼び名は J. D. Denniston, *The Greek Particles* (Oxford, 1954<sup>2</sup>), p. xliiiff. による。
- (2) Cf. Denniston, op. cit., p. 108ff. ただし Xen., *An.* 1. 9.8 の *καὶ γὰρ οὖν* については op. cit., p. 112 を参照。
- (3) Cf. Denniston, op. cit., p. 461f.
- (4) Denniston の説明 (op. cit., p. xliii) によると、先行する文にこういうものがあるのが普通で、後続する文の方にこれがあるのは少ないというが、今回対象にした範囲に関しては、正にその逆であった。しかしその理由は、Denniston が 重文をなす一つのセンテンスの節と節のつながりを問題にしているのに対して、私はつねに二つの文と文のつながりを扱ったからであろう。
- (5) 拙論「プルタルコスの伝記における「性格」」(中村・松本・岡編『ギリシア・ローマの神と人間』(東海大学出版会 1979) 所収) の第 7, 8 節を参照。
- (6) クセノポンとしては異常な長さの文が『アナバシス』3. 1.2 にある。OCT のテキストで 12 行あり、103 語から成っている。しかし実際には、この文はいくつもの *δέ* で連結された短い文の集合にすぎず、通常のクセノポンなら、この *δέ* ごとに区切って独立した七つか八つの文にするとところである。ただ OCT ではそれらすべての *δέ* の前にピリオド (あるいはセミコロン) ではなくコンマが打ってあるので、一つの文として扱うが、全巻中この文だけがこうも長いのはどう考えても異常で、こうなると写本の作成者や写本の歴史というようなことを考えずにはいられない。このほかにも例えば、プルタルコスの文章が読みにくいというのは定評のあるところだが、その読みにくさの原因の一つは、当然句読点を期待する場所にそれがないということにあって、これも写本の伝統のせいだろう。

- (7) 本誌第11号の拙稿「トゥキュディデスにおける Parataxis と Hypotaxis」2および7頁参照。
- (7a) 同様に *An.* 2. 2.3 には *ὥς γάρ*..., 2. 2.13 には *ἐπεὶ γάρ*... があるが、これらの *ὥς* や *ἐπεὶ* は共に理由を表わしてはいない。いずれにせよ *ἐπεὶ γάρ*... *ὥς γάρ*... という句は甚だ稀なのである。ついでながらトゥキュディデスには *ἐπεὶ δὲ*... というどこにでもありそうな句がない (*ἐπεὶ δὲ*... *δὲ*... はある)。こういうのは作家個人個人の癖と言ってもいいのかも知れない。
- (8) 演説はトゥキュディデスのというより演説者のだからというので一応省くとしても、とにかくトゥキュディデスの文というのは、意図を表わす分詞構文を多く使っていることから言っても（本誌7号の拙論「ツキシデスにおける分詞構文の用法」23頁参照）、Hypotaxis が多いという構文から言っても（本誌11号の上記註(7)に挙げた拙論の19頁以下を参照）、そして今回の *particulae* の使い方から言っても、一般に想像されるより主観の強い文章だと思う。もっとも、これだけはっきり文の表面にその証拠をちりばめているだけ正直なのだという見方もできる。
- (9) 正確に言うとトゥキュディデスは「五十年史」の中に50年の歴史を書いてはいない。50年の最後の10年は言わば戦争前史で、1. 24—65 と 119—146 に分けて書いている。
- (10) ひとつの理由は、102節ではこのイトメの反乱の鎮圧のためにスパルタはアテナイに加勢を求めている、そこで、なぜ加勢を求めたのかを説明したり、ところが加勢を求めてみたものの期待したほどの成果が上がらずに、スパルタ人がいらいらしたなどということがあって、これがスパルタ・アテナイ間に亀裂を起こさせ、亀裂が生じればたがいに相手方に疑いの目を向け、そうなれば、というような結構複雑な情勢が語られているのに対し、103節の方は、ようやく反乱が収拾され、その結果スパルタをはじめ諸国は何をしたかを列挙しているだけだからである。